香港東華醫院と廣東人ネットワーク

——二十世紀初頭における救災活動を中心に——

帆刈浩之

一　はじめに
二　東華醫院の組織と活動
(1)　創設と組織
(2)　活動と經營
三　救災活動と香港
(1)　十九世紀末期における救災活動
(2)　二十世紀初頭における救災活動
四　小　結

一　はじめに

香港史に關する本格的研究は植民地行政史として、あるいは歴代總督の統治史として出發した。(1) その後、香港の高度經濟成長とそれにともなう社會の成熟によって獨自の「香港」社會の存在が人々に認識され、學術面では香港研究の隆盛を見るに至る。とりわけ香港史研究においては大凡二つの傾向、すなわち香港の華人に關する研究、そして香港とその外部との歴史的關係の解明という課題に焦點があてられてきたといえる。一口に香港華人とはいっても、その構成は居住地と

しての都市・農村・漁村という地理的相違に加えて、階層または地縁・血縁さらにエスニック系などの違いが並存し、それぞれが獨自の社會組織を形成していたことが明らかになっている。(2) また、香港の對外關係については、近代以降の大英帝國の極東據點としての側面が存在する一方、歷史的に華南地域の一部として位置していたことがとりわけ重視される。それは中國との地域的連續性と同時に、日本および東南アジアとのつながりも存在していたことを意味する。そして主として華人の商業活動によって形成された地域內あるいは地域間ネットワークが考察の對象とされてきたのである。(3)

この二つの傾向が示唆しているように、香港社會の歷史的特質は香港華人の活動、とりわけ商業活動などを外部とのつながりの局面において捉えることによって把握可能になると考えられる。これを本稿の課題に引き附けて言えば、香港華人社會の內部に發達した固有の社會システムとそれが機能していた廣東および海外に廣がる華人ネットワークとの關係性の解明が求められていると言える。(4)

そこで本稿では、商業活動と深く關連しながら發達した、社會システムとしての慈善を中心的に擔ってきた東華醫院の活動を檢討する。東華醫院の歷史に關してはすでに幾つかの論考があるが、(5) 初期の歷史の全貌はエリザベス・シン女史によって明らかにされている。その中でシン女史は、①香港政廳と華人社會の關係、②華人社會のリーダーシップに關わる社會組織としての東華醫院、③中國との關係、という三つの視點を提示した上で具體的分析を行っている。(6) そこでは基本的に香港華人社會の發展を體現するものとして東華醫院が捉えられているが、香港の華人社會內部における東華醫院のリーダーシップ確立過程に重點が置かれ、香港政廳や中國、さらに海外華人との關係もその文脈で說明されている。換言すれば、ローカルコミュニティーとしての香港の自立性、自己完結性が強調されていると思われる。しかし、香港の發展は外部との相互依存性、開放性に由來するのであり、このことは東華醫院が中國とりわけ後背地である廣東と海外華人との橋渡し役としてその影響力を強化させていった事實からも確認できるのである。とくに中國民間社會に發達した中間的諸組織（宗族または同鄉者の共同財產によって運營される「堂」や同鄉會館など）の結びつきによる同鄉ネットワークが移民・貿易・

慈善に關わる機能を擔っていた。香港の東華醫院はそのネットワークの結び目に位置し、各種情報の集約または發信據點として存在していた。香港華人社會における社會システムおよび、それが海外に廣がる廣東人の同鄉ネットワークとの關係の中でどのように機能していたか、その全面的解明は今後の課題であるが、さしあたり初步的作業として、まず香港華人社會の初期形成過程を概觀した上で、東華醫院の組織と活動の概要を紹介する。次いで東華三院文物館所藏の檔案史料を用いて東華醫院による賑災活動の具體的實態の檢討を行い、中國とりわけ廣東の善堂および海外華人社會との關係においても機能した廣東人の同鄉ネットワークの樣態の一端を示し、さらに香港政廳との關係についても言及したい。

二　東華醫院の組織と活動

(1)　創設と組織

一八七二年創設の東華醫院は香港政廳によって正式に承認された最初の華人社會組織である。一八四一年から七二年までの植民地統治初期の三十年間、香港において華人社會と西洋人社會は基本的に分離して存在し、相互に強制や抵抗はあっても妥協や協力という關係は存在しなかった。

英國占領以前の香港島には農民・漁民・石工など二千人に滿たない人々が暮らすのみであったが、植民都市の建設にともない、勞働力および各種生活物資の供給者としての華人人口は急增する。(7) 彼らは大工・職人・苦力・家內勞働者・賣春婦・物賣り、あるいは廣東官憲から逃れた犯罪者などで、中國の傳統的社會の中ではマージナルな存在であった。一八四四年には香港島の華人人口は一萬九千人にまで增加し、その內の一萬三千人がビクトリア市に集中し、水上居民は約四千五百人を數えた。(8) 特に三合會など會黨の勢力は活發で一八四七年、香港の華人人口の約四分の三は會黨メンバーであり、香港は華南における三合會の司令部とさえ言われた。(9)

一八四四年、治安維持を圖るべく總督ディヴィス（J. Davis）が導入した保甲制は單身出稼ぎ者が多い香港では有效に機能せず、同年八月、人頭稅徵收の提案は華人買辦商人を中心に反發を買い、下層勞働者を卷き込んで罷市が實行され、三千人が香港を離れた。そこで香港政廳は專門的に華人事務を扱う官員を設ける。一八四六年、「總登記官」（Registrar General, 一八四四年設置。當時は「編官」と譯され、後に「華民政務司」と呼ばれた。一九一三年、Secretary for Chinese Affairs と改名）に「撫華道」（Protector of Chinese Inhabitants）を兼任させ、地保をその管轄下に置き、華人の統制に當たらせた。一八六一年地保の廢止によって華民政務司が直接に戶籍登記はもとより、營業許可・社會福利・教育など華人に關するあらゆる事務を擔當し、香港政廳と華人社會との橋梁として機能するに至る。(10)

植民地となった香港島では清朝の科擧試驗は實施されず、士大夫層の成長や宗族による地域統制は存在しなかった。(11) そのため、香港初期の華人社會における組織化は東南アジアの華人社會と類似する動きを示した。すなわち、會黨・廟・街坊を核にしながら地域統合がなされたのである。(12) いくつかの街坊の代表者は廟で行われる季節祭などの運營にあたった（街坊とは鄰保組織もしくはその指導者層を意味し、地域のもめ事の調停にあたり、または複數の街坊によって盂蘭節が運營された）。(13) 宗教行事は地域の人々に社交娛樂・交易などの機會を提供し、その共同性を高める上で重要な役割を果たしたのである。

一八四七年、盧阿貴と譚阿才によって荷李活道に「文武廟」が設立された。盧阿貴は水上生活者である蜑家の出身であるが英國海軍への物資供與の見返りに土地を獲得し、賭博場や賣春宿を經營して最も裕福で影響力のある華人と言われた。(14) 一方、譚阿才は開平縣出身でシンガポールの造船所の職長であったが、一八四一年に香港へ移り、建築業者として成功を收め、後には移民ビジネスをも手懸けて富を築いた。(15)

文武廟は坊衆や各ギルドからの捐款によって財產を增やし、後には東華醫院や保良局の重要なパトロンとなる。文武廟の勢力擴大に從い、他の街坊からも値事が選出されていった。華人社會の強力な指導的組織となった文武廟は華人社會の內部紛爭の解決、清朝官僚の接待や捐官の斡旋を行うなど、エスニックグループやギルドの違いを越えた存在であった。(16)

しかし、一八七二年以降、その機能は東華醫院に取って代られ、一九〇八年の「文武廟條例」の發布により東華醫院に接收された。

文武廟とともに、香港初期における華人社會の地域リーダーシップの確立を示すものが一八五一年、譚阿才らによって倡建された太平山街の「廣福義祠」である。そこには先僑の位牌が祀られ、故郷への送還を待つ遺體が安置された。また、海外への出稼ぎを前にした病人が收容されることもあり、義祠管理者と移民斡旋業者との間に棺柩や埋葬に關する取り決めがなされていた。このように廣福義祠は大量の海外移民を送り出した香港の社會システムの中で重要な一環を擔っていたのである。(17) この間、五十年代には太平天国をはじめ華南地域の爭亂から逃れた多くの移民が香港に流入した。英商の出資になる「香港廣州輪船公司」の汽船が一八四九年より開航し、省港間を一日の旅程で結んだことも香港への移民を促進した。この中には廣東の買辦など富裕な商人も多く含まれていた。一八五四年の人口は五萬五千七百十四人であったが、翌年には七萬二千六百七人に膨れ上がり、一八六五年には十二萬五千五百四人に達した。その內の二千三十四人がヨーロッパ人で、千六百四十五人が「有色人」、殘りの十二萬千八百二十五人が華人であった。(18)

華人社會の初期形成過程における香港と他地域の華人社會との最大の違いは同郷組織の役割である。多くの海外華人社會において、その初期には幇といわれる出身地域別の社會統合が進行したとされるが、(19) 香港では以下の理由から同郷結合は重要な役割を果たさなかった。(20) ①ホスト社會の不在。人口二千人に滿たない島嶼より始まった香港では移住者が自らの自己意識を映し出す鏡としてのホスト社會が存在しなかった。②中國、とりわけ廣東との近接性。故郷廣東との往來が容易であったため同郷意識が育たなかった。③廣東人（具體的には「本地人」）の優勢。香港華人の大多數が廣東人であり、これに對抗し得る幇勢力が存在しなかった。一九一一年の統計に據ると、香港の華人人口（二十七萬五千四百六十八人、新界は除く）中、二十七萬千七百三十九人が廣東出身であり、二位の福建出身はわずかに千三百二人に過ぎなかった（以下、廣西：七百十人、江蘇：六百七人、浙江：二百八十八人、山東：二百四十四人と續く）。(21)

このように香港初期の華人社會では、廟や街坊、後にはギルドを軸に地域統合が進行していった。助葬を目的とした出身地別による「堂」が成立し始めるのは一八七〇年代以降になってからである。(22)

科擧試驗による社會的上昇が不可能な香港（捐官は存在した）にあって、エリートと見做された人々の職業は、建築業・商人・買辦・政廳職員（主として通譯官）、そしてキリスト教團體職員の五種である。(23) 十九世紀末期においては清朝の虛銜が華人エリートの資格として意味を持ったが、基本的に經營能力および富こそがエリートとなる最大の資源であった。政廳または外國商社との交涉能力の前提としての英語教育がこれに次ぐ社會資源であったと言える。こうして一八五〇～六〇年代にかけて香港に華人エリートが登場する。

一八六九年、廣福義祠の衞生狀況が西洋人社會で問題視されて閉鎖されたのを契機に、華人のための病院設立の氣運が高まる。總督マクドネル（R. MacDonnell）の要請を受けて何阿錫（裴然）および梁安（雲漢、鶴巢）ら二十人の華人エリートが設立準備に當たった。(24) 何阿錫はアヘン商社 Lyall, Still and Company の買辦で一八四九年には太平山地區に土地を購入し、後に建南米行を設立してアヘンや米の貿易を行い、七一年には賭博獨占權の取得によって巨富を得た。(25) 梁安は Gibb, Livingston and Company の買辦で、何阿錫とともに街坊のリーダーの一人であった。(26)

一八七〇年三月、「華人醫院則例」（The Chinese Hospital Ordinance）の發布により、東華醫院は正式に認可される。これは香港において華人の組織が初めて政廳によって法的に承認されたことを意味するもので香港史の劃期をなすものであった（「東華」とは「廣東華人」の意味）。華人社會より三萬ドルの募金がなされ、政廳からは建築費一萬五千ドルおよび普仁街の敷地が寄付され、四月九日、總督臨席のもと定礎式が擧行された。そして一八七二年一月には再び政廳より十萬ドルが寄付され、二月十四日に落成、總督の主催で開幕式が行われた。(27)

東華醫院の運營にあたっては十二人の華人エリートが「總理」（當初は「值事」と呼稱）として選出され、最高組織である董事局を形成した。任期は一年で選擧によって次期總理が決定された。そして、「協理」（總理經驗者が主）および「值

理」がこれを補佐した。「倡建總理」（十三人）は主席の梁安をはじめ、李玉衡（昇）〔和興金山莊〕、陳瑞南（桂士）〔瑞記洋行買辦〕、陳定之（朝忠）〔同福棧、前 Smith, Kennedy & Co. 買辦〕、羅伯常（振綱）〔香港上海銀行買辦〕、楊瓊石（寶昭）〔謙吉疋頭行〕、蔡龍之（永接）〔Gilman & Schellhass & Co. 買辦〕、高滿華（楚香）〔元發南北行〕、黃勝（平甫）〔英華書院〕、鄧鑑之（伯庸）〔廣利源南北行〕、何阿錫（裴然）〔建南米行〕、吳翼雲（振揚）〔福隆公白行〕、そして陳錦波（美揚）〔天和祥〕の計十三人である。「倡建總理」の中には五人の買辦が含まれていたが、一八七二年以降の董事局總理は買辦が三人、南北行から二人、米商・反物商・アヘン商・金山莊（カリフォルニア貿易に従事する商社のギルド）から各々一人というように六つのギルドを中心に構成され、これに花紗行・當押行・燕梳（Insurance＝保險）行・「殷商」（毎年五十ドル以上の寄付を行った者の中から選出）などが加わることがあった。(28)

「華人醫院則例」によれば、醫院建設費用を捐助した各値事および十ドル以上の捐助を行った華人は、その姓名が登錄されて「局內同人」と見做された。また香港在住の同人には總理選擧時に投票權が付與された。(29) 局內同人のリストには個人名と組織名が揭載されており、組織としては商號や「堂」および同鄉會館の名稱が擧げられている。華人の商業活動は同族・同鄉の紐帶に依據して展開されたが、東華醫院がそうした內外の商人の關與する各レベルの結合組織（商號・宗族・會館など）のニーズに應えていたことが窺える。

地域的な廣がりに關しては香港の商人・商號・堂・ギルドの名稱が多く見られるが、中には外埠の商號や同鄉會館も散見される。國內では珠江デルタ地域の各都市、北海・潮州・汕頭・厦門・泉州・福州・寧波・上海・煙臺・牛莊など、海外では長崎・神戸・横濱・マニラ・ハイフォン・バンコク・ショロン・安南・サイゴン・ラングーン・ペナン・シンガポール・シドニー・メルボルン・サンフランシスコ・ヴィクトリア・ペルーなどである。特にインドシナ半島およびマレー半島・オーストラリア・北米に集中しており、廣東商人の商業ネットワークのおおよその空間的廣がりを知ることができる。こうした廣東商人のネットワークの結び目という香港の歴史地理的條件は東華醫院の性格を大きく規定したものと考

表1　東華醫院局內同人數

1873	1878	1891	1893	1895	1901	1902	1903	1907
870	971	1705	1772	2255	2760	2842	4436	4814

えられる。

さらに局內同人數は一貫して增加傾向を示している（**表1**）[30]。とくに一八九五年および一九〇三年の增加が顯著である。これは一八九四年のペスト流行、および一九〇三年の西環分局建設に關わる勸捐に起因するものと思われる。

このように東華醫院はその董事局の構成から見る限り、香港華人とりわけ貿易商を中核とした同業ギルドの連合體であったと言える。そのことは東華醫院の捐款收入の多くを各ギルドに依存していたことからも窺える（八七頁所揭の**表3**參照）。そして、各同業ギルドを束ねる原理として廣東人としての同鄉結合が機能していた。すなわち、東華醫院は同業ギルドの連合にもとづく廣東人による同鄉會館と見做すことができるのである。こうしたギルドの構成は清末上海の寧波人ギルドである四明公所の事例と酷似する。寧波幇の各同業組織は四明公所へ寄付を通じてその慈善活動の恩惠を受けることが可能であったのである[31]。次に、東華醫院の活動およびその經營について檢討を加え、その性格に關して若干の考察を行う。

(2)　活動と經營

東華醫院の醫療機關としての變遷は香港醫學史の重要な一齣である。それは傳統的中國醫學と新たに導入された西洋醫學との確執の歩みでもあった。この問題自體檢討に値するテーマではあるが[32]、ここでは以下の事柄のみを確認しておくに止める。當初、總督は西洋醫學の採用を計畫していたが、中國の習慣に基づく運營を強硬に主張する華人側の反對に遭い、最終的にはこれに讓歩した。それは、香港にはすでに國家醫院（Civil Hospital）が存在しており、その上、現實問題として西洋醫學を極度に恐れた華人たちが中國醫學による診療を望んだからである。しかし、西洋人醫師らは東華醫院の衞生狀況を嚴しく批判し、

一八九四年のペスト流行を契機に東華醫院は次第に西洋醫學を導入するようになる。そして二年後には西洋醫學を學んだ華人醫師が初めて東華醫院に採用されたのである。患者は自ら西洋醫學か中國醫學かのどちらかを選擇することができ、一九〇八年には患者のほぼ半數が西洋醫學による治療を受けるようになった。(33)

それではなぜ、總督は華人による病院設立にそれほどまでに熱心であったのか。まず考えられることは、頻發する疫病對策として華人社會における衞生狀況の改善が緊急課題として認識されていた點である。しかし、より根本的には香港政廳と華人社會との關係に關わる問題である。膨張する華人人口の管理に失敗し續けてきた政廳は、華人社會との間に正式な交涉ルートを設定しようとしたのである。そこで華人の代表機關と目された東華醫院（特にエリートが結集する董事局）に對して華人社會側の窓口としての役割が期待されたのであった。(34) さらに、華人社會の經濟力はすでに香港政廳による植民地經營上、大いに利用價値のあるものとなっていた。

本來、香港政廳の支持のもと、「貧窮病人への看護と治療」のために設立された東華醫院ではあったが、香港および華南の歷史的條件は東華醫院にむしろ醫療以外の様々な慈善活動の發展を要求したのであった。その慈善活動とは、①難民收容・資遣回籍、②助葬、③災害救濟、④義學・託兒所・養老院の運營などであり、特に①②③が活動の中心であった。そして、④が專ら香港の華人コミュニティーを對象とした慈善活動であるのに對して、①②③はローカルコミュニティーのみならず、後背地たる廣東および外に廣がる海外華人をも救濟の對象としていた點が注目される。以下、①②④の概要を簡單に紹介しておく（③は次節で扱う）。

① 難民收容・資遣回籍

香港は移民送出港として有名であるが、實際には歸港者數が移民者數を上回ることが多かった。例えば一九〇七年の香港から中國を除く各港への移民者數、十萬五千九百六十七人に對し、歸港者數は十四萬五千八百二十二人である。一九〇八年には移民者數、七萬千八十一人に對して歸港者數は十五萬七千八百九人となっている。(35) 彼らの多くは難民として香港

に滞留し、加えて廣東省内はもとより上海・厦門・瓊州など沿岸開港都市からも出稼ぎ難民が流入した。彼らは當初、香港政廳によって廣東の英國領事を經て故郷に送還されていたが、事務手續きが煩瑣なため、東華醫院がこうした難民の內、病人には醫藥を與えて收容し、無病の者には旅費を與えて故郷へ送還するようになった。さらに一九一〇年には難民收容施設として棲流所が建造された。

一八七八年、盧賡揚（禮屏）・馮明珊（普熙）・施笙階・謝達盛など東莞縣出身の商人によって、貧苦の婦女子を專門的に收容する施設として「保良公局」（後に保良局）設立の申請がなされ、八〇年正式に認可された。[36] 以後は東華醫院・保良局、そして華民政務司の連携によって難民救濟がなされた。

② 助　葬

東華醫院による慈善活動の多くは死者に對して注がれた。これは東華醫院の前身ともいえる廣福義祠の活動を受繼いだものともいえるが、東華醫院が同鄉會館の基本的機能である助葬活動、とくに運棺に盡力したことは、社會的流動性の極めて高い香港社會において東華醫院が傳統的な同鄉會館としての性格を色濃く有していたことを示していると思われる。[37] 施棺は創設期より行われ、故郷の土地での埋葬を願って送還を待つ棺柩は東華義莊に安置された。また、南北アメリカ・オーストラリア・東南アジアなどで死亡した先僑の遺骨も東華醫院に送還され、そこから國內の善堂を經由して故郷の地へと轉送された。[38] さらに航海途中の不慮の死に備えて外洋船舶には常に棺柩が搭載されていた。

その他、東華醫院は教育事業をも行った。一八八〇年、東華醫院は文武廟の傍らにあった中華書院を接收してその運營に當たった。これは文武廟の嘗產を運營經費としたため「文武廟義學」と命名された。そして一九〇八年までに八つの義學を運營するに至ったのである。

東華醫院の慈善活動の中心が移民に關わるものであったことは東華醫院さらには香港の華人社會の性格を考える上で重要な點である。十九世紀後半以降、列強の海外植民地における勞働力需要に應じて、大量の華人が海外へ出稼ぎに出た

表2　ギルド別捐金額（1873年，單位：ドル）

金　額	ギ　ル　ド　名
1,500	南北行
1,000	洋行
700	疋頭紬緞行
500	米行，公白行，金山行
400	花紗行，洋參藥材
250	蒲包行
200	銅鐵行，當押行，出入口洋貨行，生猪欄行，鹹魚欄行，金舖行，硃珠行，京果雜貨行，杉料行，銀舖行，辦館行，七市猪肉行
150	木東家
100	縫番衣東家行
40	故衣行

※1885年には猪肉行・生藥行・煤炭西家行（以上200ドル），牛欄行・沙藤東家行・菓菜欄行（以上100ドル），搬艇義益社(83ドル)，鮮魚行（80ドル），沙藤西家行・煙絲行・成衣行・塘魚行（以上50ドル），檀香行（40ドル）などのギルドが新たに捐金を行ったが，杉料行・木東家・縫番衣東家行が捐金者リストから姿を消している。

が、その多くは香港經由で出入境していた。[39] 中にはブローカーによって拐騙され、苦力あるいは娼妓・奉公人などとして海外へと渡航した例も無數に存在した。これを帝國主義の犯罪行爲として糾彈することも可能だが、[40] 他方でその背景に人身賣買を許容するような中國の家族制度、そして「合股」あるいは同族・同鄉的な結合に見られる相互扶助的ネットワークといった固有の社會システムが機能していた事實を見過ごすことはできない。香港の華人の中には移民ビジネスによって蓄財した商人が少なくなかった。ある意味で香港の華人社會を代表して東華醫院が慈善活動を行わねばならないような狀況を香港社會自らがその經濟活動の中で創出していたとも考えられるのである。こうした家族制度・慈善活動などが複雜に絡み合った廣東人の商業活動の實態の解明は本稿に引き續く論文において檢討していくつもりである。

次に經營に關して簡單に見てみたい。東華醫院は慈善組織としての性格上、捐金が主要な資金源であった。そのため「勸捐」活動は東華醫院にとって常に最大の關心事であった。政府補助のほか、廟宇・東華醫院總理・同業ギルド・店舖・殷戶などからの捐金、總理による「沿門勸捐」、海外華人への書簡に

よる「勸捐」、汽船上での「緣部（簿）」（募金簿）による「勸捐」などの方法が採られた。この他、香港および國内外を問わず、華人社會が災害に見舞われた場合に臨時の「勸捐」が行われたが、實際にはこれも日常化していた。

同業ギルドからの捐金は東華醫院の初期において最大の収入源であった。**表2**[41]からは當時の香港で勢力を有していたギルドの職種を知ることができる。全體として貿易商が目立つが中でも南北行・買辦・反物商・米商・アヘン商・カリフォルニア貿易商の上位六つのギルドの貢獻は大きい。これらはいずれも毎年董事局に總理を送り込んでおり、香港商業界と東華醫院の強い結びつきを窺うことができる。

海外華人からの捐金は移民と東華醫院との密接な關係を示唆している。一八九五年、ヴィクトリア・ブリティシュコロンビア・サンフランシスコ・パナマ・サイゴン・ショロン・ビルマ・シャムからの捐金は銀五千百七十五兩に上った[42]。また「緣部(簿)」は中國沿岸都市または海外へ航行する客船上に置かれ乘客から集捐された。一八七三年、サンフランシスコへ向かった客船八艘で三百五十四ドルが集められ、また一九〇八年、サンフランシスコ・オーストラリア・マニラ・バンコク・シンガポール・ペルー・ヴィクトリア・メキシコなどへ渡航した客船からは緣部計百二十一册で五千八百三十ドルが集められた[43]。一八七三年、華人人口の增加による東華醫院の事業擴大に鑑み、董事たちは土地・家屋を購入し、その運用利益によって財政の安定化をはかる方針を決定した。政廳の許可を得た上で永樂坊（現在の永樂街）四十號に最初の不動産が購入された[44]。

一九〇八年における東華醫院の收支狀況を**表3**[45]に示した。まず、收入面では經常收入のうち捐金が約三十五%を占めており、依然として重要な收入源となっている。しかし、不動産賃貸による利益が三十三%とこれに次ぐ位置を占めており、財政基盤の安定化がはかられていることがわかる。問題は總收入の約四十一%をも占めている「平糶公所より借入金」などの臨時的收入の性格である。これらの資金はこの收支表では收入項目に計上されているが、同年の東華醫院の「資産・負債表」では「負債」項目を構成していた（「遊樂場資金」を除く）。すなわち、それらは基本的に將來の特定され

表3　1908年東華醫院收支表（單位：ドル）

《收入》		《支出》	
繰越金	15,031.59	醫院經營費	(計78,964.76)
不動産	28,225.47	食料費	5,713.00
捐金	(計30,101.16)	給與	12,811.51
各ギルドの捐金	12,495.20	病室經費	12,485.35
各店舗の捐金	1,526.00	藥劑費	15,914.96
汽船上での捐金	5,070.76	痘局經費	5,907.40
善士による捐金	1,152.40	分院：ペスト經費	3,863.34
善士による施藥・施衣・施棺用の捐金	1,989.30	分院：給與・食料	193.55
		文具	8,117.53
殷戸からの捐金	3,400.00	修理費	5,322.87
總理・協理・値事の捐金	1,967.50	保險	1,113.94
文武廟捐金の20%	2,500.00	地稅	602.35
政廳補助	8,000.00	衣料費	188.90
藥代，殘飯代，義莊使用代	4,041.42	備品	720.65
(以上，經常收入	計85,399.64)	雜費	6,009.41
遊樂場資金	5,000.00	救濟事業費	(計19,212.35)
文武廟より借入	6,000.00	棺柩費	6,138.79
サンフランシスコ救濟資金	5,470.17	共同墓地運營	4,804.01
平糶公所より借入	38,887.02	難民送還費	3,411.40
廣肇水災救濟資金	5,500.00	埋葬費	1,184.15
(以上，一時預かり資金	計60,857.19)	(政府墓地：ヴィクトリア)	
利子	517.60	棺柩費(同上)	1,848.85
收入計	146,774.43	埋葬費(政府墓地：九龍)	643.35
		棺柩費(同上)	1,181.80
		(以上，經常支出	計98,177.11)
		痘局建設用地購入費	54,627.00
		支出計	145,874.19
		差額	900.24

た救濟事業での支出に備えて一時的に東華醫院によって保管されたものだと考えられるのである。そして、このうちの「遊樂場資金」および「廣肇水災救濟資金」は翌一九〇九年に同額で返濟されている。

一方、支出面であるが經常支出のうち醫院經營費（約八〇%）が救濟事業費（約二〇%）を大きく上回っていることが注目される。これまで東華醫院の活動における非醫療分野での活動の重要性を指摘してきたが收支表にあらわれる救濟事業費の額の少なさはどのように解釋したらよいの

であろうか。後述するように一九〇八年に廣州・肇慶で水災が發生した際、東華醫院は香港および海外華人から約四十六萬ドルという巨額の捐金を集めている。しかし、そのほとんどは直ちに廣東の慈善組織へと送金されたため東華醫院の收入項目には計上されることはなかった。すなわち東華醫院は日常的な活動に關する一般會計とは別個に、特定の救濟活動を行うために外部からの捐助を豫定した特別會計が存在していたと思われるのである。それによって東華醫院は自らが經費を負擔することなく、救濟活動を展開することができたのである。また、後にも言及するが各地の華人社會からの相次ぐ救濟要請に對して東華醫院が財政難を理由にたびたびこれを拒否していたのは、この特別會計の資金不足を問題にしていたと推察される。そして、この特別會計は直ちに使用されて（例えば、廣東側善堂への送金）、東華醫院の收支表に記錄が殘らない場合もあれば、使用されないまま東華醫院一時預かりの形（「負債」）となる場合（**表3**の收入項目にある「文武廟より借入」「サンフランシスコ救濟資金」「平糶公所より借入」「廣肇水災救濟資金」がこれにあたる）もあったと考えられるのである。東華醫院の一九〇八年度の資產總額は不動產を中心に計十七萬六千八百五十四ドル、負債總額は計十一萬五千六十六ドルであるが、この負債額こそ東華醫院一時預かり金であり、將來に備えた救濟資金源であった。一方、前者のようにストックされずに香港を經由して直ちに中國國內へと送られた捐金は、華僑送金と同樣に正確な金額は把握困難であるが相當な額に達したと推測される。廣東省での相次ぐ災害は東華醫院の救災活動を日常化させていた。そのため、東華醫院の海外華人に對する勸捐も頻繁となり、その捐金によって成立する特別會計の役割は重要な意味をもつに至った。次節ではこうした特別會計によって行われた東華醫院の災害救濟活動を檢討することで、廣東人の同鄉ネットワークの重要性を示すと同時に、東華醫院と香港政廳および廣東側善堂との關係の變容についても考察を加えることとする。

三　救災活動と香港

東華醫院が行った醫療以外の活動は香港の法制度上では違法であったが、現實には移民審查や難民送還など華人に關す

る業務において、東華醫院は香港政廳の植民地統治に大きく貢獻していたのであった。しかし政廳にとって東華醫院の社會的・政治的影響力の擴大はあまり望ましいものではなく、特に清朝官憲との關係緊密化は最も憂慮すべき事柄であった。しかし、二十世紀以降、東華醫院と廣東省の善堂との「合辦」による救災が行われる一方、香港政廳との間にも正式な共同救災活動が實現するようになる。それは慈善を政治的資源とした華人エリートらの實質的影響力の擴大を示していた。まず十九世紀末期における東華醫院の救災活動をめぐる狀況を簡單に見てみたい。

(1) 十九世紀末期における救災活動

東華醫院による救災活動は一八七四年に始まる。同年八月十二日、香港を臺風が襲い、船舶の沈沒により多くの人命が失われた。東華醫院の總理たちは被害者の遺體回收に努め、彼らを手厚く埋葬した。一八八〇年に昂船洲海岸で臺風による遭難者と見られる遺骨百餘具が發見された時には、香港總督の寄付を得て共同墓地が築かれた。一八九五年六月十九日、香港が再び臺風の被害を受けた際にも、東華醫院は遺體回收に盡力し、新聞紙上に被害者の特徵を示した公告を掲載して、その親族に遺體の受領を訴えた。(46) このように植民地香港內での救災活動である限り、香港政廳との間に矛盾は發生しなかった。しかし、救災の對象範圍が中國に及ぶに至り、「慈善」活動は政治的意味を帶びたものとして了解されるようになったのである。

一八七〇年代中頃以降、清朝は歐米各國に在外公使館の設置を實現し、棄民から海外華人保護へ政策轉換したが、そうした轉換を促した要因は清朝が海外華人の經濟力や社會的影響力を認識するようになったことである。(47)

一八七七年、山西省の水災が華北に擴大した時、當時直隸總督であった李鴻章は救災資金の財源として香港・南洋で活躍していた潮州商人に着目する。李は福建總督の丁日昌に對し、高滿華（廷楷）と柯振捷の二人の潮州商人に官職と引き替えに勸捐の任務を與えるよう提言した。汕頭出身の高滿華は元發行という香港最大の貿易商社（南北行）の商人であり、

東華醫院の創設メンバーの一人でもあった。[48] また、柯振捷も南北行の商人で、一八七四年に東華醫院の總理、一八七三年及び七五年に協理を勤めている。この勸捐によって最終的に東華醫院を含めた他の都市の慈善組織からの捐金總額は合計五十萬兩に上った。[49]

次いで一八八五年春、廣東で洪水が發生した。東華醫院はただちに食糧を送り、香港・シンガポール・ペルーなどの海外華人から集められた捐金總額は十萬ドルに上った。しかし、香港の有力商人である何阿美（獻墀）[50]は兩廣總督張之洞に救災經費未使用分約三萬ドルを送金する準備のある旨を傳え、これが香港政廳の知るところとなり政治問題化する。政廳は清朝政府が東華醫院を中國の統治機構の一部と見做しており、これはイギリスの領土支配權への侵犯であると考えたのであった。[51] これ以後、東華醫院と清朝官憲との接觸は「慈善」目的のみに限定されることとなった。そして、香港政廳は香港の華人エリート層を植民地體制の內部に取り込むことで中國からの影響力を防止しようと努めてゆく。具體的には次のような措置が採られた。華民政務司署の擴充、立法局の華人議席設置（一八八〇～八二年：伍廷芳、一八八四～九〇年：黃勝、一八九〇～一九一四年：何啓、一八九六～一九一四年：韋玉）、太平紳士への任命（一八七八年～：伍廷芳、何啓、韋玉、黃勝）、潔淨局委員への任命（一八八六年：何啓、一八九二年：劉渭川）、香港總商會への加入（三十四會員中、二會員が華人商社）などである。彼らはいずれも西洋の教育を受けた履歷をもつ東華醫院の董事經驗者であり、香港政廳は彼らに東華醫院に替わる社會的地位を付與しようとしたのである。[52]

その後も中國各地から香港やマカオなどの華人商人に對する救災依賴が後を絶たなかった。地方官紳層からの勸捐要求の中には、近日中に賑捐による實官付與の停止や捐納額の値上げが實施されるなどと宣傳するものもあった。[53]

しかし、東華醫院による慈善活動の特徵をより明確に示しているのは民間の慈善組織、とくに廣東人コミュニティーからの要請に對する處置であった。しかも、そこにおける情報傳達や關係性構築のあり方は中國社會特有の同鄉結合といったインフォーマルな方法に據ったため、香港政廳の把握するところではなかった。若干の例を見てみよう。

光緒二十五年（一八九九）、皖北の協賑公所からの災害援助の要請がなされたが、東華醫院はその返書の中で、近年の物價高騰や不景氣に加えて、雷州・瓊州・省城・山東から賑濟要請が相次ぎ、力盡きたために、どうしても要請に應えられない狀況である旨を述べていた。(54)

次の例は災害救濟の事例ではないが、同鄉結合に依據してなされた救濟要請の實際と送金方法、およびそこで東華醫院が果たした役割が興味深く示されている。

光緒二十六年（一九〇〇）八月、義和團事件に際して米價高騰に苦しむ北京在住廣東人同鄉の官紳からの捐金依賴を受けた上海廣肇公所は東華醫院に集捐を打電要請した。東華醫院の董事は衆議の上、前月天津救濟のために集めた捐金を充てることを決定する。さらに東華醫院は廣州の崇正善堂および澳門の鏡湖醫院に對して同樣の要請を行った。そして東華醫院は一千ドルを上海匯豐銀行を通して廣肇公所へ送金し、鏡湖醫院も銀五百兩を泰隆銀號から東華醫院に送金し、東華醫院はそれを香港の瑞吉銀號を通して廣肇公所へと送ったのであった。(55)

このように救濟要請という情報は北京→上海→香港→廣州・澳門という經路で瞬時に傳達されたのであるが、そこには廣東商人の商業ネットワークの存在を前提にした同鄉結合が機能していたのである。この經路の內、上海—香港間の事情を何棣生（甘棠）という香港商人の活動を通して見てみよう。

廣東省寶安縣人である何棣生は何東（Robert Ho Tung）の弟として一八六六年香港に生まれた。皇家英文大書院（Central English School）を卒業後、ジャーディン＝マセソン商會の保險部門で買辦を勤める傍ら、自らは糖業に投資して、その支店網は廣州・汕頭・九江・蕪湖・鎭江・南京・上海・寧波・煙臺・青島・宜昌・天津・漢口・牛莊・マカオ・マニラ・イロイロ・ジャワに展開していた。彼は一九〇六年に東華醫院の主席總理となり華商公局の創建者の一人でもある。

北京から救濟要請がなされた時、彼は上海に駐在しており、北京の窮狀を知ると廣肇公所での會議を召集して香港・廣

州への要請を提議したのであった。[56] 商業ネットワークは商品の流通のみならず商業活動に伴う具體的な人の移動をも促進し、それが慈善のための同郷結合の活性化の前提となっていたと言える。そして香港の東華醫院は自ら捐金を據出した他に廣州・澳門との關係において情報および捐金の集約據點かつ發送據點として機能していたのである。これは金融センターとしての香港の性格を反映したものと言えよう。

しかし、東華醫院は同郷者からの救濟要請すべてに應じたわけではなかった。光緒二十六年八月、河北省宣化縣の旱害救濟を訴えてきた廣州の廣濟醫院に對し、東華醫院はハワイ・福建、さらに北京・天津からの救災要請が相次いでいる事情を述べて暗にこれを拒否していたのである。[57]

また、光緒二十七年（一九〇一）一月、東華醫院は廣州の廣仁善堂からの香港での開捐要請に對して、香港では前年に六回も勸捐が實施されたことや風災被害の救濟を理由に拒否したのであった。しかし、同じ廣仁善堂を通してなされた陝西巡撫からの賑濟要請に關しては同月中旬より開捐を行うとされた。まず二千ドルの送金が決定されたが、香港には陝西の銀號がほとんどないことから、廣仁善堂に省城で代わりの銀號を探すように依頼がなされた。そして、東華醫院はまず香港の瑞吉銀號を通して省城の福全銀店に送金し、そこから新泰厚へ轉送してもらい、最終的に陝西巡撫へ届くように手配した。しかし、實際には新泰厚の代わりに貞信號が送金を行い、しかもその領收書によれば東華醫院ではなく廣仁善堂が送金したと記載されていた。[58] 東華醫院は直ちに廣仁善堂に對して誤りを正すよう要請したのであった。東華醫院と廣東の善堂とは廣東人に對する廣域にわたる慈善活動に際して協力關係にあったが、同時に對抗する局面をも含んでいたと思われる。この點に關しては次節で檢討する。

十九世紀末期、華人商人の富裕化を背景に發展した東華醫院は、その力を牽制あるいは利用しようとした香港政廳および清朝官憲の壓力下にありながらも、これらとの調和をはかり、同郷關係にもとづく民閒組織のネットワークを擴大することでその影響力を強化させていったのである。

(2) 二十世紀初頭における救災活動

十九世紀末における救災活動では東華醫院の活動をめぐって香港政廳と清朝政府あるいは廣東善堂側とが互いに牽制し合ったために、そこでは十分な連絡にもとづく協力は實現できなかった。しかし、二十世紀初頭では次のような變化が現われた。まず一つは救災活動における東華醫院と廣東の善堂との關係のあり方である。「合辦」救災という名のもとに協力と對抗を含んだ關係が形成されたのであった。また、香港政廳との關係では政廳は東華醫院の救災活動を公式に承認した上で、東華醫院との協力關係の強化をはかっていったと見られるのである。

① 一九〇六年香港風災

一九〇六年（光緒三十二年）九月十八日、香港は大型臺風に襲われ、「大小の兵・商各船、漁艇など約三千、溺斃人口はすでに數千人を越えている。……これは開埠六十年來かつてない浩劫である。……蓮花山・虎門および大嶼山などでは水面の至る所に屍骸がある。……」といわれる被災狀況であった。そして東華醫院は廣濟醫院・方便醫院などに小艇の派遣及び遺體回收を要請するとともに、各船戶は東華醫院に登錄の上、被災程度に應じて救濟することとされた(59)。

香港政廳は急遽「香港臺風救濟基金合同委員會」（General Committee of the Typhoon Relief Fund）を設置して災害救援に乘り出した。九月二十二日には「小委員會」（Sub-Committee, 委員長：華民政務司ブレウィン（Brewin）、祕書：馮華川(60)）が設けられ、さらにそのもとに東華醫院を本部にした、華人によって構成される「特別調査委員會」（委員長：馮華川）が設置され、船舶の被災狀況の確認や救濟要請に對する調査が行われた。「小委員會」に求められた緊急任務は生活の資を失った寡婦や孤兒の救濟、および遺體の收容・埋葬であった。二百五名の寡婦・孤兒が救濟され、多くは出身村へと送還された。また約一萬八千ドルが東華醫院による貧窮者救濟および遺體埋葬の費用に充てられた。しかし、政廳によって基金が準備された主要な理由は風災による香港の貿易に對する損害や混亂を最小限に止めることにあった。事實、船

舶の修復および購入に充てられた代金は、「小委員會」による支出の約八十五%、救濟基金全體の支出の中でも約七十%を占めていた。(61)

また、救濟基金收入の半分以上は東華醫院が香港總督ネイザン（M. Nathan）から賑災のための開捐の諭を受け、海外華人および中國各都市の善堂や醫院に呼び掛けて集められた捐金によるものであった。(62) 東華醫院による集捐は光緒三十二年八月から十二月まで十五次にわたり、義援金の總額は十五萬ドルを超えた。捐金者リストからは東華醫院と關係の深い團體や個人を確認することができる。まず、廣州九善堂（愛育善堂・兩粵廣仁善堂・方便醫院・廣濟醫院・崇正善堂・惠行善院・明善堂・述善善堂・潤身善社）のうち、七つの善堂の名が擧がっており、捐金額もそれぞれが一千ドル以上と大口であった。これら廣州の善堂は日常的に東華醫院と共同して難民・病人・遺體の故郷送還に盡力していた。海外華人からの捐金は横濱・神戸・マニラ・タイ・ペナン・シンガポール・オーストラリア・サンフランシスコ・ハワイ・ペルーなどから送られてきており、ここからも當時の廣東商人の商業ネットワークの地域的廣がりを見て取ることができる。また、中國國內の廣東人の同鄉組織としては上海南海別墅および青島廣東公所が捐金を行っていた。

今回の救濟活動における香港華人の活躍振りは誰の目にも明らかであった。「香港臺風救濟基金合同委員會」（四十九名）、「小委員會」（十二名）、「調查委員會」（十二名）のうち、それぞれ三十四名、八名、十二名が香港華人であり、香港政廳も「臺風救濟基金委員會報告書」の中で委員會における華人メンバーの活躍を高く評價していた。劉鑄伯・鄧志昂・韋玉・何啓などはすべての委員會のメンバーとして參加していた。(63)

しかし、救災活動における東華醫院の貢獻は集捐のみではなかった。そこでは東華醫院が有する商業ネットワークにおける人的資源が動員された。東華醫院は被災船舶に對する救濟にあたり、各船戸が普安公司から購入していた保險內容に示された各船舶の評價額を參考にして圓滑に救濟金を支給することができたのであった。(64) なお、普安公司は東華醫院に度々總理を送り出しており、香港の華商界では有數の燕梳行（Insurance company）であったことが知られる。

このように、政廳との共同救災活動が進行する中、清朝官憲との接觸も續いていた。光緒三十二年十一月江南地方で水災が發生し救援要請が盛宣懷からなされた。東華醫院は生昌裕號を通じて銀千五百兩を上海廣肇公所へ送り、そこから上海廣仁堂に渡すように依頼がなされたのである。(65)

② 一九〇七年廣東平糶

光緒三十三年（一九〇七）二月、廣東省で米價が騰貴し、東莞縣では搶米事件が頻發した。省城九大善堂および總商會は東華醫院と連合して平糶總公所（愛育善堂内に設置）を開辦することを決定した。そして、東華醫院に開捐要請の書簡を送付し、同月九日および十一日には、廣州各善堂の代表者が東華醫院を訪れ、善後策を協議するに至った。訪問したのは熊禮廷（崇正善堂・廣濟醫院・明善堂）、林煥墀・徐澍棠（廣仁善堂）、明子遠（述善善堂）、陳惠普（方便醫院）、郭仙洲（愛育堂）、陳香鄉（惠行善院）、盧輔宸（潤身社）の八名である。東華醫院側は十一日に董事局會議を開き以下の四項目を決議した。(66)

(1)年來の不況に加え、昨年はサンフランシスコ地震および香港の臺風災害のための勸捐が頻繁で、今年も痘局建造のために各行の捐助を要するために、省城での平糶に對して本港での開捐は不可能である。さしあたり、光緒三十年の三堂（東華醫院、廣濟醫院、崇正善堂）合辦平糶の際の殘金（約六萬一千七百七十八ドル）および利息をこれに充てるべきである。

(2)東華醫院と省城の各行商・善堂が外埠に打電して、後に送金されてきた捐款は、東華醫院が三分の一を、省各行商・善堂が三分の二を確保する。香港において米價が高騰せず、平糶を開辦する必要がない場合、本院はこの三分の一を賑濟項目に繰り込み、將來の各埠および内地での賑濟用に備え、本院は一文も用いない。

(3)省城の各善堂が行う平糶の方法に東華醫院は一切關與しないし、もし得失が生じてもこれに關わらない。

(4)省城の各善堂は米穀採購要員二名を派遣する。通信や通貨などで不明な點があれば、東華醫院は協力を惜しまない。

光緒三十年の平糶の詳細は不明であるが、それが「三堂合辦」であったこと、さらにその殘金が「省城の崇正善堂、廣濟醫院に分貯」されていたという事實は注目に値する。そして、今回の平糶における東華醫院の方針から窺うに、名目上は「三堂合辦」であるが、實際の運營責任は個別負擔が原則であったことがわかる。しかし、今回の開捐は省城の平糶が主目的であるが、「三堂合辦」である以上、東華醫院は光緒三十年の平糶殘金および外埠からの捐金の三分の一に對する請求權を有し、さらに「三堂」による平糶であることの掲示、新聞廣告による聲明が必要であると考えたのである。(67) そして、同十一日に東華醫院は香港の各米行に對して至急米穀を廣東へ搬出するよう依頼している。(68)

そして、東華醫院は海外華人に對して勸捐を行った。その中では米價高騰の原因として蕪湖・鎭江・廣西からの米穀輸出禁止、タイでの米穀不作および東莞での搶米が擧げられ、「三堂合辦」による平糶を準備していることが傳えられ、最後は「列位善長諸君が廣く恢助を爲して梓里に惠を及ぼし、大局を保全せしめんことを務めて懇う。粤垣幸甚たり、中國幸甚たり。」という結びで捐金が要請された。(69) そして、華人送金を扱う海外の銀號に對しては、香港で米穀採買を行うため、捐款を廣東省に轉送する必要はなく、東華醫院に直接送金すること、さらに香港のどの銀號に送金したかを知らせるよう通知がなされた。(70)

今回の勸捐に對しては次の都市から捐金が寄せられた。(71)

天津・漢口・上海・鎭江・福州・廣州・横濱・神戸・長崎・安南・ショロン・バンコク・ハイフォン・サイゴン・ラングーン・クアラルンプール・ハノイ・シドニー・ヴァンクーバー・ヴィクトリア・ニューヨーク・フィラデルフィア・サンフランシスコ・パナマ・ペルー

海外華人からの捐款總額は約九萬九千ドル（通信費など除く）に上り、その三分の二にあたる約六萬六千ドルが平糶總公所の取り分とされた。東華醫院は平糶總公所と連絡を取りながら、その代金は直接、香港の公源號に渡され、劉小焯・阮荔邨の責任のもと安南への購米および輸送業務が委託された。公源號は元發行と並ぶ米穀貿易商號であり、幾度も東華醫

院の總理を送り出している（一八八八、一八九九、一九一一、一九一八、一九二三）。ちなみに、劉小焯は一八九九年の東華醫院總理であり、阮荔邨は一九〇〇年の東華醫院主席總理である。

平糶全體に關わる資金は光緒三十年の平糶殘金および各善堂からの立替金などの約十萬ドル、および廣州の各銀號からの借入金十萬ドルに加え、兩廣總督など中國官憲からの捐款八萬ドル、總計約二十八萬ドルが準備された。省内に四ヶ所の平糶廠が分設され、廣濟醫院の海傍に全省四鄉平糶轉運局が設立され各府縣四鄉に對する救濟に當たった。平糶は三月開辦、五月停止の豫定であったが、早稻の收穫不振、欽州・廉州の匪賊の活發化によって再び米價が騰貴したため、勸捐が繼續され、九月五日にようやく平糶は停止された。最終的に集められた捐款總額は計三十八萬ドル餘りに達し、諸經費を差し引いた殘金は五萬ドル餘りとなった。これは廣州の銀號へ預けられ、廣東省における今後の平糶資金とすることとされた。

これまで廣東省における平糶用米穀は主に蕪湖からの移入に賴ってきたが、今回蕪湖米が不作であったため安南での買附けを餘儀なくされたのである。そして、これは香港の貿易商號である公源號の協力があって實現したのであった。捐款總額に占める東華醫院による海外華人からの捐款の割合は決して大きくはないが、香港に送金された捐款を省内へ轉送せず、香港商號による安南への米穀買附けへと直接振り向けることで迅速な採買が可能となった點に香港の華人ネットワークの機能を見いだすことができる。東華醫院は海外華人への勸捐の役割はもちろん、香港の華人商號が有する貿易ネットワークを利用する形で米の採買に大きく貢獻したのである。(72)

翌光緒三十四年（一九〇八）春、再び米價が高騰したため、省城九大善堂および總商會によって前年同樣、平糶公所が組織され、東華醫院にも協力要請がなされた。しかし、東華醫院は廣東善堂側の平糶後の處理に不滿を抱いていたため、すぐには要請に應じなかった。すなわち、方便醫院から東華醫院へ送付された昨年の平糶徵信錄に記錄されている「三堂餘款」收入の項目には廣濟醫院と崇正善堂の名があるのみで東華醫院の名が抹消されていたのである。東華醫院は名譽に

關わる問題として抗議の書簡を送付した。そして内容の修正を確認したのち平糴合辦に同意したのであった。その後、東華醫院は海外華人から寄せられた捐金を平糴公所へと送金し、三月から蕪湖米が廣東へと運搬され始めた。(73)

③　一九〇八年廣東水災

平糴が行われているさなかの一九〇八年六月、廣州・肇慶では長雨による洪水のため西北兩江が暴漲し、少なくとも百三十七箇所以上の堤防が決壊し、飢民は百萬人を超えると見られた。(74)北江に接する六縣（三水・四會・清遠・英德・曲江・仁化）を視察したミッション系調査團の報告は、堤防の決壊、作物の流失、砂土の耕地への流入、家屋の破壊などの被害を擧げ、緊急の食糧援助を訴えていた。(75)洪水による死亡者數は多くはなかったが、食糧・水牛・家屋や土地など生活手段を失った人々の流民化、社會秩序の混亂が最も危惧されたのである。

六月三十日、被災地域では不逞の徒によって多くの婦女や兒童が海外へと略賣される事態が生じたため、救災公所は東華醫院および香港保良局に對して、香港での出國船舶の嚴重取締および被害者の保護を要請した。(76)そして東華醫院が華民政務司に通知したことで香港政廳も救災活動に乘り出した。

六月、香港總督ルガード（E. Lugard）は義援金として三萬ドルの據出を提議し、立法局の決議を經たのち、廣東の英國領事から廣州の善堂へと送金された。(77)しかし、さらなる援助は東華醫院の勸捐を待つことになる。省城各善堂から再び「合辦籌賑」を要請された東華醫院は董事局會議でこれを承認して、華民政務司へ通知した上、ビスケットおよび一萬ドルを省城の善堂へ送った。(78)また、省城各善堂の代表は平糴公所に集まり、廣仁善堂に救災公所を設立して賑濟に當たることが決定された。(79)

七月の時點で香港および海外華人から東華醫院に寄せられた捐款は合計十一萬二千ドルに達し、うち四萬ドルは省城へ送金されたが、殘りの七萬二千ドルの送金に關しては平糴徵信錄の改竄問題もあり、香港華人エリートの一部から異論が出された。そこで主立った華人エリートが東華醫院に集まり協議がなされた。戊申年主席總理の譚鶴坡をはじめ、華民政

表4　救災公所の收支狀況（7月現在）

收　入		支　出	
香港東華醫院捐款	73,850ドル	賑　米	102,200餘ドル
澳門鏡湖醫院捐款	9,300ドル	雜費・石炭・船賃・餅干等	16,700餘ドル
本所收入捐款	178,300ドル	計	118,900餘ドル
計	267,850ドル	殘　金	148,000餘ドル

務司アーヴィング（E. A. Irving）・何啓・韋玉・劉鑄伯・古輝山・何棣生・周少岐・鄧志昂などが會議に出席した。

何棣生や陳賡虞は送金の必要性を否定し、救災公所による捐款の誤用を恐れる街坊の要求通り、東華醫院が自ら船舶を雇って被災地へ赴いた上で賑濟に當たるべきだと主張した。彼らは海外華人が踴躍して捐款するのは東華醫院を尊重しているからこそであると考えた。これに對して、陳洛川や伍漢墀は、すでに董事局會議で省城各善堂との「合辦」は合意されているとして反論した。終始會議をリードした劉鑄伯は後者の主張を補足する形で、海外華人への勸捐要請が廣東側との連名でなされたこと、また東華醫院董事の多忙などの理由を擧げ、省城へ人を派遣して救災公所の活動をチェックする方法が適當だと主張し、大方の同意を得たのであった。そして、現任總理を含む三十二名が五つの組に分かれ、交代で省救災公所へ赴き、實情を調査した上で、華民政務司へ通告し、はじめて殘りの捐款を送金することとされた。劉鑄伯はさらに送金手段などに關して一切三十二名に委任すること、今後は會議開催の必要なきことを述べて會議はおわった(80)。

今回、東華醫院から救災公所に送られた捐款はどれほどの比重を占めたであろうか。救災公所に派遣された第二組の董事が救災公所の收支狀況を調査している（表4）(81)。

東華醫院および鏡湖醫院からの捐款の合計は總收入の約半分を占めており、海外華人の豐富な資金源を背景とした東華醫院・鏡湖醫院の重要性が窺われる。しかし、先の例にも見たように、東華醫院は無條件に廣東側善堂の捐款要請に應じたわけではなかった。七月末、再び臺風が香港・廣東を襲撃した際、救災公所側は西北兩江の水災問題に加えて、風災救濟問題をも提議しようとした。これに對してこの會議に參加していた東華醫院派遣による第三組の董事たちは、今回の捐款は專ら

水災籌賑のためであり、風災救濟に充てることは宗旨に反する上、海外華人からの捐款も水災救濟用のものであるとして反論したのであった。さらに、この度の風災では香港も廣東同様に被害を受けており、省城の賑恤は省城で辦理すべきであり、香港は香港で辦理することが適切であると主張した。(82) 東華醫院の董事は捐款の使途を限定することで廣東側に對する自主性を確立しようとしていたと思われる。最終的に東華醫院は香港で九萬一千五百二十八ドルを、また海外華人より三十七萬一千六十九ドルを集めることができた。(83)

香港での臺風の被害は家屋倒壞の他に河川を運航する輪船が沈沒して四百二十四人が死亡するなど、政廳財産の損害のみで十萬ドルと推計された。香港政廳は風災救援のために再び東華醫院を本部とした「臺風救濟委員會」を設置した。委員會は東華醫院の現任總理に何啓・韋玉・馮華川・劉鑄伯といった華人エリートを加えたメンバーから構成された。第二回會議では次のような方針が決定された。①保險金による補償が期待できる大型ジャンクや漁船には救濟金は支給しない。これは一九〇六年の風災救援の方法と同様である。援助を要する被災船舶、とくに寡婦や孤兒に對して補助金を給付する。②「小委員會」を設置して、被災調査に當たらせる。(84) ③華人を救助した英國軍艦の船員に對する感謝狀を政廳から該當部門へ轉送してもらうようにする。今回の風災において香港華人エリートは救濟對象としての廣東と香港を秤にかけた上で香港の利害を優先させたと見られる。

また、今回の水災救濟では香港で初めて華人によるチャリティーバザー（「賚物助賑水災會」）が開催された。(85) 水災難民の賑濟を唯一の宗旨として、本部は華商公局に置かれた。同會の主席には馮華川および何棣生が就任し、値理には韋玉・周少岐・劉鑄伯・招聿三・潘寅存・古輝山ら東華醫院の董事を勤めた華人エリートの名が擧げられている。チャリティー會場は華人商號が密集していた西營盤に設けられ、會期は七月十日から十六日までで入場券は五十セントであった。(86) 最終的にこのバザーによって八萬一千六百九十ドルの收益が得られた。(87) 開會初日には總督ルガードや華民政務司アーヴィングをはじめ米領事や獨領事なども參列し、華人による善擧を稱贊した。(88)

二十世紀初頭、東華醫院と救災公所、すなわち廣東各善堂との救濟活動における關係は「合辦」とは言いながらも、實際は東華醫院が様々な條件を提示することによって慈善活動の自主性を強調していた。それは香港華人エリート自らの經濟力に加えて、豊富な資金を有する海外の廣東人ネットワークを後盾としていたからである。

一方、東華醫院は香港政廳に認可された華人醫院としての側面があった。一九〇八年、水災救賑が行われる中、廣州方便醫院は經費不足を理由に勸捐を行うべく、その喜捨簿での名義借用を東華醫院に要求した。しかし東華醫院は「本院係中西合辦之故」という理由からこれを拒否したのであった(89)。「中西合辦」という表現は相次ぐ廣東の善堂からの勸捐要請を斷るための口實に過ぎないともいえる。しかし、これは事實の一面を示しており、自らを「香港」の慈善組織として廣東側善堂と差別化しようとする意圖を讀み取ることができるのである。

このように東華醫院は廣東省城の善堂および香港政廳との閒に二つの「合辦」關係を有したが、その內實は全く異なるものであり、それは香港という場に規定された東華醫院の歷史的性格を象徵していたと考えられる。そもそも、東華醫院と廣東各善堂との關係は法律はもとより契約等によって規定されたものではなく、同鄉關係という制度化されない中國民閒社會のシステムに依據していたのである。從って、そこにおける「合辦」の有り様は歷史的に變化する相互關係を反映していたと考えられる。二十世紀初頭の災害救濟活動のケースでは東華醫院の自主性確立に見られるように廣東華人ネットワークにおける香港の地政學的重要性が示されていたといえる。

「中西合辦」という場合、東華醫院は植民地香港における制度化された存在であった。特に十九世紀末期以降、政廳による華人エリートの體制內への取り込みが進行した。しかし、東華醫院の廣東人ネットワークに支えられた社會活動はそうした制度の枠を越えて機能していたのである。香港政廳もこうしたネットワークの存在とその利用價値を認識することで、東華醫院との協力に積極的となったと考えられる。この事は、政廳の東華醫院に對する補助金の增額にも示されている。一九〇四年に東華醫院が赤字決算となって以來、政廳からは毎年六千ドルが援助されていた。一九〇七年六月、東華

醫院董事局は一九〇五年および一九〇六年に政廳のために行った遺體の改葬・埋葬・運棺、さらに難民の故郷への送還などの經費が大幅に增加し、諸物價の騰貴と相俟って、大きな負擔となっている事態を說明し、補助金を一萬ドルに引き上げることを要請した。これに對して、總督ルガードは東華醫院の經濟狀況および政廳に對する支援を鑑みた上で二千ドルの追加、すなわち八千ドルの補助金支給を承認したのであった。(90) 移民都市香港の社會秩序はその後背地である廣東省および海外との關係において維持されなければならなかった。その意味で香港政廳の東華醫院に對する經濟援助は必要不可缺であった。

四　小　結

本稿で明らかになったことを要約しておく。

(1)組織に關して、東華醫院は同業ギルドの連合にもとづく廣東人による同鄉會館であった。その活動の財源は基本的にギルドや海外華人からの捐金に依據していたが、次第に不動產收入の比率を高めて財政基盤を強化していった。また、特定の救濟事業のために海外華人から寄せられた捐金に關しては東華醫院の一般會計とは別枠の特別會計に一時的に保管されていた。それは直ちに支出される場合が多かったと思われるが、負債項目として東華醫院にプールされることもあった。

(2)醫療以外の様々な社會的活動の充實。東華醫院の社會活動はローカルコミュニティーである香港のみならず、むしろ廣東および海外華人社會を對象とする慈善活動が重要な意味をもっていた。インフォーマルな形で結ばれた廣東人ネットワークは日本・東南アジア・南北アメリカの各都市に及び、東華醫院はその連接部に位置していた。

(3)香港政廳は東華醫院の成立後しばらく、その勢力伸張を恐れたが、後には清朝政府との關係を牽制しつつ、香港華人エリート層の體制內への取り込みをはかるようになる。そして二十世紀に入ると救災活動での正式な連携が實現する。

(4)二十世紀初頭、東華醫院と廣東の善堂側との閒で「合辦」救災が實現したが、その協力と對抗關係の過程で東華醫院は自主性を確立していった。

香港華人社會の歷史を理解するためには、中國（とくに廣東）・香港政廳・海外廣東人社會という三者の相互關係を總合的に捉える必要がある。香港の地理的・歷史的條件のために、この三者との良好な關係を維持することは香港華人社會の生存および發展にとって重要な前提であった。十九世紀末から二十世紀初頭にかけて清朝政府と香港政廳との狹閒で、東華醫院は決して自らの政治的立場を表明することなく、ローカルコミュニティーである香港、後背地たる廣東、そして海外華人からの救濟要請を滿足させるべく慈善活動に從事したのである。

香港政廳の一九〇八年行政報告は次のように述べていた。

この年の不況は疑いなく國際貿易に影響を與えている總合的理由に大きく起因するものであった。しかしながら、その困難さは四つの地域的災難―ペスト・洪水・臺風・ボイコット―によって增大されたと言える。(91)

ここに「四つの地域的災難」(four local misfortunes)として擧げられているペスト・自然災害・ボイコットはいずれも一九〇八年のみならず香港の近代史全體を特徵づける重要な歷史事象であった。東華醫院はこの四つの災難のうち、ペスト・洪水・臺風の三つの災難の除去に積極的であった。それは政治的・經濟的利害が輻輳する香港という地にあってとられた一つの戰略であった。すなわち東華醫院は慈善という非政治的表現をとることで經濟的利益の保障という政治目的を達成していたのである。東華醫院は廣東人ネットワークをその基盤としながらも中國や香港政廳など各方面との關係を強化することで逆に自主性を獲得していったと思われる。東華醫院による難民送還や助葬活動の檢討など、後背地としての廣東、海外華人社會を結んだ廣東人ネットワークの全容の解明は今後の課題としたい。

註

（1）例えば、E. J. Eitel, *Europe in China: The History of Hong Kong from the Beginning to the Year 1882.* (Hong Kong, Kelly and Walsh, 1895), G. B. Endacott, *A History of Hong Kong.* (London, Oxford University Press, 1958), G. B. Endacott, *Government and People in Hong Kong 1841-1962: A Constitutional History.* (Hong Kong, Hong Kong University Press, 1964), 研究史に關しては、K. C. Fok, "Hong Kong Historical Research in Hong Kong: 1895 to the Present", *Asian Research Trends 3 (1993).* 霍啓昌『香港史教學參考資料』(第一册、香港三聯書店、一九九五年) を參照。

（2）本稿では "Hong Kong Chinese" を香港「中國人」あるいは香港「華僑」ではなく、廣くエスニシティとしての漢民族という意味で香港「華人」として總稱する。それは「中國人」という言葉が持つ一枚岩的な意味合いや「華僑」という言葉が持つ民族主義への志向性を相對化するためである。香港にも中國民族主義の影響は及んだが、もとより "Hong Kong Chinese" のアイデンティティーは多様であり（エスニック系、出身地別、教育履歷など）、さらに英國植民地という環境に置かれたために政治や社會の變化に柔軟に對應せざるを得ない側面を強く有していた。そのため香港政廳をはじめ、清朝中央（地方）政府、さらに海外華人社會など各方面との良好な關係維持が生存の必須條件であった。外部へと廣がるネットワーク構築志向の強さは香港「華人」の特質の一つと考えられる。また、こうした議論は同時に社會秩序の形成を「統合」「凝集」ではなく、「結合」と「分離」の循環の局面において捉えようとすることをも意圖している。

以下、香港華人に關する主要な研究を擧げておく。

新界の農村研究として、Hugh Baker, *A Chinese Lineage Village: Sheung Shui.* (London, Frank Cass, 1968), David Faure, *The Structure of Chinese Rural Society: Lineage and Village in the Eastern New Territories, Hong Kong.* (Hong Kong, Oxford University Press, 1986), James Hayes, *The Rural Communities of Hong Kong, Studies and Themes.* (Hong Kong, Oxford University Press, 1983), 瀨川昌久『中國人の村落と宗教—香港新界農村の社會人類學的研究』(弘文堂、一九九一年) など。都市發展に關しては、James Hayes, *Tsuen Wan: Growth of a "New Town" and Its People.* (Hong Kong, Oxford University Press, 1993) など。水上居民に關しては、可兒弘明『香港の水上居民—中國社會史の斷面』(岩波書店、一九七〇年)。華人社會に關しては、Henry Lethbridge, *Hong Kong: Stability and Change, A Collection of Essays* (Hong Kong, Oxford University Press, 1978), Carl T. Smith, *A Sense of History: Studies in the Social and Urban History of Hong Kong* (Hong Kong, Hong Kong Educational Publishing Co., 1995), 華人エリートに關しては、Carl T. Smith, *Chinese Christians: Elites,*

Middleman, and the Church in Hong Kong (Hong Kong, Oxford University Press, 1985), 社會組織に關しては' Elizabeth Sinn, *Power and Charity: The Early History of the Tung Wah Hospital, Hong Kong* (Hong Kong, Oxford University Press, 1989), E. Sinn, "Regional Associations in Pre-War Hong Kong", in Sinn ed., *Between East and West: Aspects of Social and Political Development in Hong Kong.* (Hong Kong, Centre of Asian Studies, University of Hong Kong, 1990), 可兒弘明『近代中國の苦力と「豬花」』(岩波書店' 一九七九年) などがある。

(3) 古典的名著としては' 羅香林『香港與中西文化之交流』(中國學社' 一九六一年) があるが' 近年では' K. C. Fok, "Private Chinese Business Letters and the Study of Hong Kong History: A Preliminary Report." in *Collected Essays on Various Historical Materials for Hong Kong Studies.* (Hong Kong, Hong Kong Museum of History Press, 1990), 濱下武志「イギリス帝國經濟と中國—香港」『近代中國の國際的契機』(東京大學出版會' 一九九〇年)' Choi Chi-cheung, "Competition among brothers: the Kin Tye Lung Company and its associate companies", in Rajeswary Ampalavanar Brown ed., *Chinese Business Enterprise in Asia.* (London, Routledge, 1995). など。

(4) 濱下武志氏は前掲「イギリス帝國經濟と中國—香港」の中で' 香港經濟史研究の分析枠組は「集散地・中繼地自體の經濟制度とそれが機能している廣域經濟圈との相關關係如何という形において提起されなければならない」と述べている (一八四頁)。こうした視角は香港の社會システムの在り方を分析する際にも有效だと考えられる。

(5) Lethbridge, *Hong Kong: Stability and Change,* pp. 52–70., Carl T. Smith, "Notes on Tung Wah Hospital, Hong Kong", *Journal of the Hong Kong Branch of the Royal Asiatic Society* (以下' *JHKBRAS* と略す) 16 (1976) pp. 263–280.

(6) Sinn, *Power and Charity,* pp. 1–6.

(7) Eitel, *Europe in China,* p. 134. 具體的には「本地」・客家・福佬など複數のエスニックグループが含まれる。本稿でいうところの「廣東人」とはエスニック系としては「本地」を指し' 地域的廣がりとしては珠江デルタ地域および肇慶が中心地域として想定されている。客家ネットワークや潮州人ネットワーク自體も個別に議論されるべき課題である。

(8) Carl T. Smith, "The Chinese Settlement of British Hong Kong", *Chung Chi Bulletin* 48 (1970), pp. 26–32. 後に *A Sense of History.* に收錄。

(9) J. W. Norton-Kyshe, *The History of the Laws and Courts of Hong Kong.* (Hong Kong, 1898) vol. I, p. 127.

(10) Sinn, *Power and Charity,* pp. 11–12., Lethbridge, *Hong Kong: Stability and Change,* pp. 62–63.

(11) 一八九八年に租借された「新界」では科擧資格に依據しない形で宗族による地域統治が實現していた。James Hayes,

The Hong Kong Region. 參照。

(12) Aline K. Wong, "Chinese Voluntary Associations in Southeast Asian Cities and the Kaifongs in Hong Kong", *JHKBRAS* 11 (1971), pp. 62–73.

(13) 中國および臺灣における近鄰宗教團體の研究として以下を參照。今堀誠二『中國封建社會の機構』(日本學術振興會、一九五五年)。同『中國封建社會の構造』(日本學術振興會、一九七八年)。同『北平市民の自治構成』(文求堂、一九四七年)。Kristofer M. Schipper, "Neighborhood Cult Association in Traditional Taiwan", in G. W. Skinner, ed. *The City in Late Imperial China* (Stanford, Stanford University Press, 1977)

(14) C. T. Smith, "The Emergence of a Chinese Elite in Hong Kong", *JHKBRAS* 11 (1971), pp. 74–115., 後に *Chinese Christians*. に收錄。

(15) *Ibid*., pp. 114–115.

(16) Eitel, *Europe in China*, p. 282., C. T. Smith, "Notes on Chinese Temples in Hong Kong", *JHKBRAS* 13 (1973), pp. 133–139.

(17) Sinn, *Power and Charity*, pp. 18–19.

(18) Endacott, *A History of Hong Kong*, p. 98, p. 116.

(19) Lawrence Crissman, "The Segmentary Structure of Urban Overseas Chinese Communities", *Man* 2:2 (June, 1967), pp. 185–204.

(20) Sinn, "Regional Associations in Pre-War Hong Kong", in Sinn ed., *Between East and West*., pp. 175–176.

(21) *Hong Kong Sessional Papers*, Report on the Census of the Colony for 1911, p. 14.

(22) Sinn, "Regional Associations in Pre-War Hong Kong", pp. 159–186.

(23) C. T. Smith, *Chinese Christians*., p. 114. 高額納稅者(商社も含む)の上位二十位中、華人は一八七六年の時點では八人(社)であったのが五年後の一八八一年には十七人(社)をも占めるようになった。(Chan Wai Kwan, *The Making of Hong Kong Society—Three Studies of Class Formation in Early Hong Kong*. Oxford, Clarendon Press, 1991., p. 107.)

(24) 東華醫院設立の經緯については次を參照。Sinn, *Power and Charity*, pp. 30–49.

(25) C. T. Smith, *Chinese Christians*., p. 123.

(26) *Ibid*., pp. 125–126.

(27) 『香港東華三院百年史略』(上冊、一九七〇年)一八九頁。

(28) 同上書。六一～八四頁。

(29) 原文は「所有本例格式開列捐建醫院經費各值事姓名、及有樂捐銀數至十元者、其名、姓准陸續註入冊部均作局內同人…」。東華三院文物館所藏『東華醫院徵信錄』(各年)より。しかし香港總督や外國商社、「無名氏」なども含まれ、さらに同じ組織が繰返し掲載されることもあり、登錄は嚴密になされてはいない。

(30) 『東華醫院徵信錄』各年。但し一九〇八年以降「局內同人」は掲載されなくなる。

(31) 拙稿「近代上海における遺體處理問題と四明公所—同鄉ギルドと中國の都市化—」『史學雜誌』百三—二、一九九四年、八〇～八五頁。しかし、香港の東華醫院の場合にはローカルコミュニティーの代表機關としての「街坊」の關與が重要な役割を果たした面もあり、廣東人が華人の壓倒的多數を占めた香港と多數の地方幇が存在した上海とでは狀況が異なる。

(32) 詳しくは、Sinn, *Power and Charity*, pp. 60-69, 79-81, 159-208. を參照。

(33) "Report on the Blue Book for 1908", *Hong Kong Administrative Reports for the Year 1908*, I, General Administration, p. 9.

(34) Sinn, *Power and Charity*, pp. 42-44.

(35) 一九〇八年の出港者數大幅減の理由として、①バンカ・ビリトン方面への移民停止、②廣東西江の洪水による求人困難、③中國國內での鐵道建設への勞働力需要の增加、が擧げられている。"Report on the Blue Book for 1908", *Hong Kong Administrative Reports for the Year 1908*, I, General Administration, Appendix E, E9, E26.

(36) 保良局に關しては、可兒弘明『近代中國の苦力と「豬花」』および『香港保良局史略 1878—1968』(香港、一九七九年)、參照。

(37) 拙稿「清末上海四明公所の「運棺ネットワーク」の形成—近代中國社會における同鄉結合について—」『社會經濟史學』五九—六、一九九四年、參照。

(38) 『香港東華三院百年史略』上册、九四～九五頁、二二六～二二八頁。

(39) 杉原薰「華僑の移民ネットワークと東南アジア經濟—十九世紀末～一九三〇年代を中心に」『アジアから考える 6 長期社會變動』東京大學出版會、一九九四年。

(40) 可兒『近代中國の苦力と「豬花」』など。

(41) 『東華醫院徵信錄』(癸酉年) 6a～6b, (乙酉年) 三集 1a～1b。「蒲包」は蒲で編んだ「かます」のこと。果物や乾果・菓子などを包裝するのに用いる。

(42) 『東華醫院徵信錄』(乙未年) 三集 43a～47b。

(43) 『東華醫院徵信錄』(癸酉年) 8a～12b, (戊申至己酉年) 四集 142b。

(44) 『香港東華三院百年史略』下册、一九七〇年、四三頁「東華三院百年大事年表」。

(45) *Hong Kong Administrative Reports for the Year 1908*. I, C19.

(46) 『香港東華三院百年史略』上册、一七九頁。

(47) Yen Ching-Hwang, *Coolies and Mandarins: China's Protection of Overseas Chinese during the Late Ching Period (1851-1911)* (Singapore, Singapore University Press, 1985), pp. 249-266.

(48) 林熙(高貞白)「從香港的元發行談起」『大成』一一七、一九八三。

(49) Sinn, *Power and Charity*, p. 99.

(50) 何阿美はかつてオーストラリアに居住し中國人勞働者の輸送業務に携わり、後には華民政務司署や中國海關などに勤務した經驗を持つ。東華醫院總理（一八八二）、保良局總理（一八八三、八四）を歷任。李陞との共同出資による安泰保險公司は一八八一年に華人企業としては初めて香港總商會の會員となった。Sinn, *Power and Charity*, p. 137.

(51) Sinn, *Power and Charity*, pp. 141–149.

(52) C. T. Smith, *Chinese Christians*, pp. 161–167., Sinn, *Power and Charity*, pp. 131–132. 何れも著名人であり說明は不要と思われるが韋玉のみ若干紹介しておく。韋玉、字は寶柵、中山縣人。一八四九年香港に生まれる。父は有利銀行（Chartered Mercantile Bank of India, London, and China）の買辦。政廳の運營する中央書院で英語を學んだ後、一八六八年スコットランドへ四年間留學。中國人として最初の西洋留學であった。一八七二年有利銀行に入行し、父の死後、後を繼いで買辦となる。公共活動に熱心で東華醫院總理（一八八一年、一八八八年）、保良局永遠總理（一八九三年～）を歷任した。華人社會の衞生狀況改善に盡力し、後にヴィクトリア地區の衞生狀況に關する報告書を書いたチャドウィックとも親しかったという（吳醒濂『香港華人名人史略』五洲書局、一九三七年、三～四頁）。なお、何啓は政廳と華人社會の間に立って東華醫院の近代化に盡力した。G. H. Choa, *The Life and Times of Sir Kai Ho Kai —A Prominent Figure in Nineteenth-Century Hong Kong*. (Hong Kong, The Chinese University Press, 1981).

(53) 『華字日報』一九〇一年十月八日「開辦順直善後賑捐」、同年十月二十三日「衙封貢監即日加成」、同年十月二十八日「貴州賑捐虛銜封典翎枝貢監」。

(54) 東華三院文物館所藏『東華致外界信件』(1899/2/27～1900/2/14) 己亥三月、協賑公所宛書簡。「…惟是本港孤懸海島、籌款維艱。近來百物沸騰、生意愈形冷淡、且各處紛紛告賑、弩末勢成。雷瓊之捐饮甫停、省城之平糶踵至、他如客歲杪山東求賑等事、百端環集搜括無遺、而有愛莫助之情、尙苦心長力短、時艱滿目、徒喚奈何、再四思維、無從下手、所有方命之處、希爲原宥一切幸甚歉甚。…」。

(55) 『東華致外界信件』(1899/2/27～1900/2/14) 庚子八月十三日、崇正善堂宛書簡。庚子八月十四日、鏡湖醫院宛書簡。庚子八月二十四日、廣肇公所宛書簡。庚子十月十七日、鏡湖醫院宛書簡。庚子十月十八日、廣肇公所宛書簡。

(56) 『香港華人名人史略』十六～十九頁。

(57) 『東華致外界信件』(1899/2/27～1900/2/14) 庚子八月十九日、廣濟醫院宛書簡。「…昔以檀埠閩省告災於前、今以京津告災於後、一隅港地、迭次募捐、悉索以供、恐疲奔命。…」。

(58) 『東華致外界信件』(1901/2/27～1902/2/2) 辛丑元月初九日、廣仁善堂宛書簡、など。

(59) 『東華致外界信件』(1906/7/11～1907/2/3) 光緒三十二年八月三日、廣濟醫院宛書簡。光緒三十二年八月四日、方便

醫院宛書簡。光緒三十二年八月九日、廣濟醫院宛書簡、など。

(60) 馮華川は東華醫院總理（一八九二）、保良局總理（一八九四）を歴任し、中華銀行買辦を勤めたほか、西洋醫學に精通していたため一八九九年に潔淨局委員に任命された。C. T. Smith, *Chinese Christians*, p. 166.

(61) *Hong Kong Sessional Papers. 1907*, "Report of the Typhoon Relief Fund Committee." p. 277-287.

(62) 『東華致外界信件』(1906/7/11～1907/2/3) 光緒三十二年八月四日、曉生仁翁宛書簡。

(63) 劉鑄伯は寶安人で一八五六年に香港の貧しい家庭に育ったが皇仁書院を卒業。東華醫院では總理（一八九九年）、主席總理（一九〇九年）を勤め、華商公局の主席（一九〇六年）や潔淨局委員にも任命された。鄧志昂は南海人。十九世紀末に來港して鴻裕銀號の經營で財をなす。社會公益活動に熱心で、東華醫院の主席總理（一九〇五年）を勤めた他、香港大學の中文學院の創設に盡力した。鄧志昂の子、肇堅も弱冠二十三歳で東華醫院總理となり、二代に渉って總理となった。

(64) 『東華致外界信件』(1906/7/11～1907/2/3) 光緒三十二年八月十八日、普安公司宛書簡。

(65) 『東華致外界信件』(1906/7/11～1907/2/3) 光緒三十二年十一月九日、善後總局宛書簡。光緒三十二年十一月九日、廣肇公所宛書簡。

(66) 『東華致外界信件』(1907/2/25～1907/11/29) 光緒三十三年二月十八日、平糶總公所宛書簡。愛育善堂は『南海縣志』十六卷』（宣統二年）によると、一八七一年の創設で「粤之有善堂、此爲嚆矢」とされ、義學・施棺・贈藥・贍老などが行われたが（卷六建置略）、その章程は上海普育善堂のものを模範としており、さらにサンフランシスコやオーストラリアの華人から捐助を受けていた（『愛育善堂徵信錄』一九四八年）。廣東善堂と香港および海外華人社會との關係の解明は今後に期したい。

(67) 東華三院文物館所藏『董事局會議錄』（光緒三十三年）二月十一日。

(68) 『東華致外界信件』(1907/2/25～1907/11/29) 光緒三十三年二月十一日、總商會宛書簡。

(69) 『東華致外界信件』(1907/2/25～1907/11/29) 光緒三十三年二月二十日、吉隆廣肇會館宛書簡。

(70) 『東華致外界信件』(1907/2/25～1907/11/29) 光緒三十三年二月二十日、三月二十日、業安隆寶號宛書簡。

(71) 『東華致外界信件』(1907/2/25～1907/11/29)。

(72) 『東華致外界信件』(1907/2/25～1907/11/29) 光緒三十三年二月三十日、ニューヨーク中華公所宛書簡。光緒三十三年三月十三日、三月十八日、三月二十七日、四月十八日、五月十四日、六月五日、八月四日、八月八日、九月二日、平糶總公所宛書簡。鄧雨生『全粤社會實錄初編』調査全粤社會處、宣統二年。

(73) 『董事局會議錄』(光緒三十四年)、二月十一日、二月二十二日。

(74) *China Mail*, 1908. 6. 25.

(75) *China Mail*, 1908. 7. 20.
(76) 『華字日報』一九〇八年六月三〇日。『董事局會議錄』(光緒三十四年)五月三十日。
(77) *Hong Kong Administrative Reports for the Year 1908*. Report on the Blue Book for 1908, I, General Administration, Appendix C. p. 15. 『華字日報』一九〇八年七月三日。
(78) 『董事局會議錄』(光緒三十四年)五月二十五日、五月二十五日晩。
(79) 『華字日報』一九〇八年六月二十五日。
(80) 『董事局會議錄』(光緒三十四年)六月七日。
(81) 『董事局會議錄』(光緒三十四年)六月二十六日。
(82) 『董事局會議錄』(光緒三十四年)七月四日。
(83) *Hong Kong Administrative Reports for the Year 1908*. Report on the Blue Book for 1908, I, General Administration, Appendix C. p. 15.
(84) *Hong Kong Sessional Papers. 1908*, pp. 559-566.
(85) 『華字日報』一九〇八年七月一日。
(86) 『華字日報』一九〇八年七月四日。
(87) *Hong Kong Administrative Reports for the Year 1908*. Report on the Blue Book for 1908, I, General Administration, Appendix C. p. 15.
(88) 『華字日報』一九〇八年七月十一日。
(89) 『董事局會議錄』(光緒三十四年)六月二十八日。
(90) C. O. 129/341, ₩33843, 23 Sept. 1907. Approval of Additional Grant of $2, 000 Annually to Tung Wah Hospital.
(91) *Hong Kong Administrative Reports for the Year 1908*. Report on the Blue Book for 1908, I, General Administration, Appendix C-8.

〔附記〕東華醫院史料の閲覧にあたっては東華三院文物館から多くの便宜をはかっていただいた。附して謝意を表する次第である。なお、本稿は平成七年度文部省科學研究費補助金(特別研究員奨勵費)による研究成果の一部である。

organizations, including the Transport Commissioner for the Six Fortresses. As a result, the central government was forced to establish the Commissioners for levying rations 糧料使.

In the Zhenyuan 貞元 period, in light of the serious nature of the invasion from Tibet, the Department of Public Revenue founded larger-scale and permanent local agencies, branch officers 巡院 and the Transport Commissioner for Daibei region 代北水運使. Both of them were under the control of the Department of Public Revenue. By the Changqing 長慶 period, following Xian-zong's 憲宗 success in substantially depriving local Military Governors 節度使 of their authority, the fiscal control of Department of Public Revenue on the northen frontiers was established, which was administered by three kinds of local agencies (branch officers, the Transport Commissioner for Daibei region, and the Commissioners for provisioning the armies 供軍使). However, after the Uyghur's invasion in 841–3, this provisioning system could no longer function effectively. Subsequently, in Xi-zong's 僖宗 reign, the system was collapsed completely during the rebellion of Sha-tuo 沙陀 over the Daibei region.

Originally, the function of transport to provision the northern frontiers was in fact carried out by *corvée* labour. By the end of the eighth century, long-service soldiers 官健 came to be employed in this capacity. The system whereby merchants contracted for whole duties, adopted in other districts, does not, however, seem to have emerged at any time throughout the Tang dynasty.

THE DONG HUA HOSPITAL, HONG KONG AND THE CANTONESE NETWORK: DISASTER RELIEF ACTIVITIES IN THE EARLY TWENTIETH CENTURY

HOKARI Hiroyuki

This paper comprises a part of my studies of the history of the Cantonese Network from the late-nineteenth to the early-twentieth century. In this paper I first analyze the structure and the activities of the Dong

Hua Hospital, and further examine their disaster relief activities in Hong Kong and Canton.

The Dong Hua Hospital was founded in 1869 to provide medical services for the Chinese population of Hong Kong, however, circumstances in Hong Kong at that time required other charitable social services. Thus, the Dong Hua Hospital came to manage the repatriation of emigrants and the transportation of dead bodies, as well as to organize the raising of relief funds among overseas Chinese. The Dong Hua Hospital acted as a pivot in the Cantonese Network, and as such was able to effectively obtain both reputation and financial resources.

The establishment of the Dong Hua Hospital involved the emergence of a new local elite which represented the several guilds. As the activities of the Dong Hua Hospital were extended, the government in Hong Kong began to fear the influence of Chinese officials.

In the early twentieth century the Dong Hua Hospital worked in cooperation with the benevolent associations in Canton to provide relief to disaster victims. As the city of Hong Kong flourished, the Dong Hua Hospital took the initiative in the management of social services in both Hong Kong and Canton.

THE ROLE OF IMMIGRANTS IN THE RECONSTRUCTION OF INNER SUMATRAN ETHNIC IDENTITIES IN THE EARLY MODERN ERA

HIROSUE Masashi

On the eve of the early modern era, Sumatra became one of the most prosperous commercial areas in Southeast Asia on the basis of the export of precious forest and mineral products and pepper. Pasai, Minangkabau, and south Indian merchants developed commercial networks between ports and their hinterlands.

When Aceh emerged as a powerful port polity in the sixteenth and seventeenth centuries, the influence of these merchants was overshadowed